

創造する心の形成 —「職人衆昔ばなし」より—

IX 無限の前進—文化を生む心—

矢口 新（能力開発工学センター 所長）

仕事の世界というのは、無限の前進の世界である。

「けれどもこの道は、やればやる程奥も深く広くもなって参りますので、うかうか年もとっておられませんか。」（鶴心堂表具ばなし、291ページ）

これは中村鶴心堂さんの述懐であるが、この境地に達することはなかなか一足とびには行くまい。生兵法では却って奥を極めたつもりになることが多いのであって、奥が極められぬことをさとることが、人間の出来上がり方が深いということではないだろうか。

「ふつうの『干綱』でも組めれば日本中を大威張りで西行*出来るとされていたもんですが、突込んでみれば、先には先があるもんです。」（二代目源さん組子噺、351ページ） *仕事を求めて諸国を旅すること

これは飾り障子の名人佐藤重雄さんの述懐である。やればやる程奥が深いというのは、仕事というものが、単に客体としてのものではないということであろう。こちらがのびれば、仕事の方もより深い姿を表してくるのである。これだけやればよしという決まったものとして仕事が考えられているのではない。こちらの心がのびれば、つくりあげる目標もより高く、材料もまたそれに応じて新たなものとして人間に迫って来るのであろう。つまり奥深いことを感じていること自体、仕事に生きていることであろう。次々へと仕事に挑むことが、仕事の奥深さを感じさせるのである。それは言いかえれば人間の能力の無限さである。無限におのれの力を発揮しようとする人間の心の反映である。

この道は奥深いなどという言い方は、きわめて象徴的である。それは日常的に言うとうとうとうかである。目の前の仕事に真剣にとりくむように心が出来ているのであろう。

「職人てものはふしぎなもので『こいつ出来ません』ってことが言いたくない。何とか工夫したり勉強したりして、新しい材料もこなしてみたい。だからこの頃のように、次々新しい材料が出てくると、のんびり年をとってるヒマもありませんや。」（茂作老瓦談義、125 ページ）

これは屋根屋の新井茂作さんの述懐であるが、次から次へと仕事が生まれるのである。いな自分が生み出すのである。目の前に課題があらわれる。いな自分が周囲から見つけ出すのである。

「新しいものは、むちかしいけれど、やってみるとおもしろいね。三つ折り寝椅子、安楽椅子、菊型椅子、3点セット、スツール、マガジン・ラック、どんどん新しくなっていくから、ボクの腕もどんどん新しくしていかなくっちゃ。」（台湾ホネ屋・陳乞朋、318 ページ）

これは若くして日本へ来て以来50年にわたる籐竹製造職人の述懐である。誰によらず無限に前進するのである。自分で前進を生み出すのである。目前のことに具体的に出る心がある、そういうように動く心が出来上がっているということなのであろう。それはあるいは生物というものの本質かもしれない。生物の進化とはそういうものではないだろうか。生命はおのれの環境に適合するように、おのれをつくりかえて来たというが、それは時々刻々自分の周囲をうけとり、反応していくという絶えざるいとなみの中から出来上がって来たのであろう。

人間は長い歴史の中でさまざまな環境で、さまざまな文明をつくり、それがまた消え去って、新しい文明にかわって行く。しかしそれらの文明の根底には、人間が環境に働きかけ仕事によって生命の力を実現する文化への心が動いているのではないか。

次の述懐は岡村多聞堂さんのものである。

「『終わった仕事はタレタくそ』っていうビローな諺がありますけど、あたくしはこれの信奉者です。前へ、前へ。」（多聞堂四代、297ページ）

仕事をし終わせたからこちらが伸びたのだ。こういう言葉は名人職人衆がどういう心掛けで自分の仕事を見ているかをあらわしている。自分のやった仕事に満足していない。それを仕上げたので次にやりたいことが生まれて来た、見えて来たのである。

岡村さんはこうも言っている。

「仕事をしていると頭も使うし体も使うから年をとらないんですね。（中略）あたくしもうんと良い仕事をしてうんと長生きしたいもんだと思ってます。」

「日本にはまだ確たる額装スタイルというものが打ち樹てられてはないんだから、何でも勉強して自分のものにし、次にはそいつを否定してまた前に進むーそうありたいと思ってるんです。」（297ページ）

前へ前へと進む岡村さんは、うしろを見ることもまた深い。もう数年も前であるが、エジプト展があった時の感想であらう。次のように言っている。

「今度の『エジプト展』を見て、あたくしは進化論を疑いたくなりましたね。人間は猿から進化したんだそうですが、5千年も前にこんなすばらしいレリーフを作ってるんだからなァーと、しばらくその前を動かせませんでしたよ。（中略）5千年は昔すぎますから、1200年前の本朝奈良時代をふりかえってみても、まことに大変な時代ですよ。（中略）あの正倉院の御物の保存法は、カンペキと言って良いんじゃないでしょうか。（中略）一御物の衣類なんかの納まっている唐櫃は、タツプリ間隔を置いて並べられ、中はと言うと、これまた大きな容れ物に僅うかしか入れてない。（中略）しかも毎年11月の1日から5日までの好天を選んで必ず曝涼をやることに昔っからきまっていて、さらして風を通す。一日本では、この季節が虫干しには一番良い季節なんで、絵画でもいっぺん虫干しすれば大丈夫1年はもつんです。ところが今の人には殆んどこの虫干しをなさらないし、物の蔵い方も忘れてしまっている。

（中略）例えばあの書画を入れる桐箱ですがね。昔の経師屋や美術商は、緊急の火事なんぞの時には、書画は桐箱に納めて井戸に投げ込んで逃げたもんです。4日や5日井戸に沈めたって印籠作りの桐箱は、水を通しませんし、それに万一焔に表をなめられてまっ黒に焦げたって中身の書画はピリッともしていません。（中略）虫干し一つ、しまい方一つでも、千年前の人にはよく考えているんですから、いろいろ

学ばなくっちゃいけません。」

「足利時代というのは、『床の間』が、『仏座』『貴人の座』から『美術鑑賞の座』に完成した時です。左右に壁を取って横明かりを防ぎ、斜めの自然光線で適当な高さや深さを持ち、これに花を添え香を焚いて書画を鑑賞する場所を作ったんですから、嗅覚まで動員しての美術鑑賞の演出一、イヤ見事なものですよ。」

こういう人類の歴史、古い時代の人々の立派な仕事を十二分に理解する深い心を岡村さんは身につけてしまった。自然と人間との調和した世界を古今東西にわたって自らの目で発見していくすばらしい心をもっている。こういう人がどんな心で仕事をするか。

「ところが近來、特に戦後は建築がガラリと大きく変って、いわばアメリカ式のシャープさが大いに取り入れられるようになりました。」

「新しい建築にマッチしたさらに新しい額装が創られなければならない。あたくしはそう思って去年の暮れあたりから、また新しい試みを始めています。」(301ページ)

こういう無限に前進する心が、本当に人間の文化(物質的な文明ではない)を生み出す心というものであろう。

仕事とはこのように見て来ると、人類の進歩の踏み台なのである。仕事によって人間はのびて行くのである。言いかえれば人間は成長するためには、何か自分の仕事にまっしぐらに突込まなくてはならない。そこでおのれの生命をかけなくてはならぬのではないか。そういうものがないところに人間としての成長はないといってよい。

こういう仕事が、どこでもいつでも出来るように、社会の人々の力が向けられなくてはならぬのではないか。人に仕事をさせる企業の経営者の責任はまさにそこにあるのである。

人間は働くことを通じて、つまり仕事を通じておのれの生命の焔を燃しつづける。誰もがそうであろう。それを大事にすることが、人間を大切にすることであろう。

われわれは生きて行くということがあるから、経済ということを考えなければならぬことは確かである。特に近代の社会は人々が分業によって生きて行く社会となったから、経済もポリティカルエコノミーという次元で処理されなければならなくなった。決して私経済ではなく公経済なのである。

しかし公経済も基本は人間を大切にす経済でなければならぬことは論をまたぬであろう。経済のたて前が、経済のために人間を機械部品にし、疎外するようなことがあってはならぬことも言うまでもない。この原則は誰もが反対しない所であろうが、しかし現実のこと、具体の場ではそうはならない。われわれはとかく人間であり、お互いに人間として生きて行くために協業することが大切だということを忘れ勝ちである。深く戒心すべき事ではないか。

職人衆は当世風でない仕事の仕方で、今は世の中の日の当たらぬ所に居るかもしれない。しかしそこには、人類という生物が、その生物としてのあり方を真実につきつめている姿を見せてくれている。そして現代の社会がそれを忘れているから、日が当たらない。忘れている社会が間違っているのである。もう一度社会は、物質万能、経済万能から人間の仕事に人間の生活に立ちかえらなくてはならぬのではないか。それは社会の人々のすべてによって努力されなくてはならぬ。気の付く人からその努力がなされねばならない。

わけて教育者は、そのことにこそ自分の仕事を発見すべきではないだろうか。それが教育にたずさわ
る者の人間的仕事の実現の道であろう。この道は必ずしも平坦ではない。しかしその営みは、永遠につ
づけられねばならぬのである。

**「工芸でもなんでも、物は一代なんて気短な物指しじゃ計れない。良いものを作るにはどうしても二代
三代かかるようだねえ。」**（ギヤマンの虹を大衆へ、235ページ）

これは岩田ガラスの岩田藤七さんの述懐である。

**「ええ？ 親子四代？ そうです。権勢の座は変転しますが、権力に関係なく町の片隅で手作りでやっ
ている名前も入れない手仕事というものは、連綿とシブトク続いて決して亡びるもんじゃありません
よ。」**（多聞堂四代、306ページ）

これは岡村辰雄さんの述懐である。

こうして人類の仕事は続いて行くということであろう。その道を歩く者のみが、道を知っているとい
えないだろうか。その生命の営みが、人の心に何かを残して行く。そして人類は生きつづけて行く。次々
へと新たな文化が生まれて行く。その生の営みへの個体の参加が、それが人の生きた証しなのであろう。

（了）

★本文は、能力開発工学センター紀要21号（1974）の矢口新「創造する心の形成—職人衆昔ばなしより—」から
IV章「無限の前進—文化を生む心—」を抜粋しました。

全文は能力開発工学センターのサイト（資料館）でご覧いただけます。

<http://jadec.jp/jp/modules/document/uploads/kiyou21.pdf>

★本文の引用（太字）は全て、斎藤隆介著「職人衆昔ばなし」（1968文芸春秋）によるものです。